

論文

## 看護師養成課程における地理学的視点の導入効果

Effect of Introducing Geographical Perspective in a Nursing Program

中村 努（高知大学教育学部）

NAKAMURA Tsutomu

*Faculty of Education, Kochi University*

### ABSTRACT

This paper examines the effects of developing a geographical perspective through a practical approach to sociology in a nursing program. The increased need for nursing care in the entire local community has changed greatly with greater need for nurses because of the falling birth rate and the aging population. Based on these trends, intending to help students in gaining a better understanding about nursing care and patients, this paper presents a lesson on sociology with a geographical perspective. Furthermore, the paper examines how well the introduction of geographical perspective can lead to an improved understanding of local communities for future nurses. Most students have indistinct images of sociology since their high school studies and about half of them show a strong motivation to acquire basic knowledge and skills about nursing care. According to the questionnaire about the students' impressions after the lecture, many students answered that they understand the present conditions of the health care system, which is directly related to nursing care. In addition, the questionnaire revealed that the students are aware of the usefulness of learning how local communities work for the future nursing industry, which is not directly related to medical or nursing care. A large fraction of respondents gave positive or favorable responses in their general impression of the lecture. The responses imply the acquisition of geographical perspective on local communities that contributes to the future of the nursing industry. Every student aspires to use the contents or ideas presented in the lecture in order to connect with local communities as health professionals in future. Clearly, geographical perspective enables health professionals to effectively and objectively examine local communities. Moreover, it also gives them the opportunity to reflect further their own roles in local communities and how they may establish contact with local communities.

## I. はじめに

本研究の目的は、看護師養成課程における地理学的視点の導入効果を検証することである。

地理学は、人間と地域に固有の自然や社会環境との関係およびその変化を研究し、自然現象や人文現象の地域的な差異とその要因を明らかにしようとする。人間は地理的条件から独立した存在ではなく、固有の地域的文脈をもった地域社会の構成員とみなされる。こうした視角は、在宅看護を含めた地域包括ケアにおける看護の役割を考えるうえで有効であると考えられる。

その理由は、看護が地域によって異なる社会的背景をもったケアの供給者と需要者（患者）、およびその相互作用を考慮する必要があるからである。地域包括ケアの供給者は、医師、薬剤師や看護師、介護士、保健師、理学療法士、作業療法士といった医療関連従事者から、家族や知人・友人、民生委員といった血縁、地縁、社縁に基づく人的資源に至るまで広範なアクターに及び地域によって多様である。最適なケアを提供するためには、いかなる組織や人的資源と連携すれば、自らの役割を最大限発揮できるかを地域ごとに考えなければならない。そのため、組織や人的資源が地域内外のどこにどれほど分布し、それらが個々の文化的、社会的背景においていかなる関係性にあるか、地理学的視点から検討することが、地域包括ケアシステムの構築にとって有効と考えられる。

一方、地域包括ケアの需要者は、それぞれ異なった文化的、社会的価値観に基づいた生き方を志向している。こうした価値観の多くは、地域社会で醸成される共通の文化的、社会的価値観に根差している。したがって、ケアの供給者自らの価値基準によることなく、患者の文化的、社会的価値観に沿ったケアを提供するためには、彼らが属する地域社会に対する深い洞察と理解が必要となる。ただ、そうした価値観は、グローバルに共通するものから、町内会や集落といったローカルレベルで共有されるものまで多様であり、異なるスケールの価値観の重層性を考慮する必要がある。

看護師は看護を通して、ケア供給者と患者との相互作用の橋渡し役として、異なる地域社会の性格への対応が求められる。そのため、看護はケア供給者のなかでも、地域社会における自らの役割を見極めると同時に、地域社会の構成員として患者を理解すべき機会が多い職業であると考えられる。

しかしながら、看護師養成課程において、上記の視点から看護を通じて接触する地域社会について教育する機会は必ずしも多くはない。先行研究として、米山(1964)は、看護自体を医師・看護師・患者・その他の医療関係者間の相互作用の「場」としての社会現象と規定し、そうした社会現象の分析および説明を達成するために、その現象に対

して社会的・社会心理学的および歴史的考察を含めて人類学的アプローチを企てている。

こうしたアプローチを指向する学問領域として、地理学の隣接分野である、社会学や文化人類学を援用した、看護社会学や看護人類学が挙げられる。このうち、看護社会学は医療社会学の発達の副産物とされる(米山, 1964)。ところが、看護社会学と医療社会学とではその対象が異なる。医療に関する人文学のうち、そのもっとも著名な例が医療社会学である(池田, 2010)。医療社会学はパーソンズの病人役割論(Parsons, 1951)をベースにした理論を展開しているが、その対象はあくまで医療(医学的な治療)であり、医療が社会において果たしている役割やその内部の人間関係や思考などを問題としている(勝又, 2010)<sup>1)</sup>。これに対して、看護の対象は患者であり、その患者のよりよい理解のために社会学やその他の学問領域からの援用を求める(勝又, 2010)。

また、看護人類学は、患者が属している文化と社会に関心を向けることで、患者という具体的実体を通しつねに理解しようとする。そして、看護における人間全体を見る全体論的な視点で、文化的な多様性の受容について提案することを目的としている(池田, 2010)。したがって、いずれの学問分野においても、患者が属する文化や社会に注目する点は共通しているが、自然的要因に加えて、経済や政治といったその他の人文的要因を含めて、地域の特徴を客観的にとらえるための理論的検討は十分とはいえない。

看護学の一類型として位置付けられる地域看護学は、健康を支援する立場から地域で生活する人々のQOLの向上とそれらを支える公正で安全な地域社会の構築に寄与することを探求する学問とされ、地理学の視点と類似している(平成24~26年度日本地域看護学会地域看護学術委員会)。地域看護学が成立した背景には、地域に暮らす個人のみならず、地域全体の看護が重要視されており、基礎的知識として地域を理解することが必要になってきているという、看護現場のニーズの増大が挙げられる。地域看護学の学問的確立が目指されているものの、地域の定義や、理論的枠組みの構築については、いまだ学界内の模索が続いている。現在、実習を中心とした実践事例を紹介したり、その効果を検証したりする研究成果がみられる。これらは地域社会の一員として患者を理解するため、看護実践を採用するという実践的性格が強い反面、理論的指向性は弱い。そのため、地域包括ケアシステムにおける地域のもつ意味や意義について、地理学において展開されてきた議論の援用が有効と思われる。

そこで本稿では、看護とその対象たる患者をよりよく理解するための地理学的視点を踏まえた社会学の講義案を提示するとともに、将来の看護実践に資する地域社会の理解につながったかを検証して、地理学的視点の導入による

効果を考察する。

## II. 研究の方法

本稿では、A看護学校の2016年度1年次前期に開講された「社会学」において、地理学的視点の導入を試みた。A看護学校は2015年度に開校した3年制の看護師養成所である。指定規則の97単位3000時間より多い101単位3000時間が設定され、看護学の基礎的知識・技術・態度・行動を学ぶカリキュラムが編制されている。1年次には、人間を統合的に理解できる能力や科学的思考ができる能力を身につけ、社会の変化に対応しうる基盤と看護学の基礎的知識・技術・態度・行動を学ぶ（A看護学校学習の手引き）。社会学は、1年次において履修が想定される基礎分野の一つである。基礎分野には科学的思考の基盤（人間工学、論理的思考演習、心理学）と、人間の生活・社会の理解（社会学、国語リテラシー、英会話、看護英語、倫理学、健康運動、人間関係・カウンセリング、教育学、情報科学・演習）の2つの区分があり、社会学は後者に位置付けられている。当該科目は2016年度に入学した1年次の全学生43名を対象にした必修科目となっている。学生には理系、文系選択者が混在し、高等学校において、地理を選択しなかった学生が多い。受講生に対して、第1回目の講義後にアンケートを実施し、社会学のイメージとともに、学びたいことを回答してもらった。第7回の講義最終回において、講義の感想と抱負を自由に回答してもらった。対象学生には研究内容の説明後、アンケート票の配布と回収を行うことで、本人から研究協力の同意を得た。

## III. 講義の構成

講義において心がけたことは、地域社会の仕組みを伝えるため、できる限り実態に即した具体的なテーマを設定することであった。授業は半期7回であった。全7回の講義構成案は以下の通りである。

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 食と地域社会—フードデザート問題
- 第3回 経済と地域社会
- 第4回 防災と地域社会
- 第5回 医療と地域社会
- 第6回 健康と地域社会—健康格差
- 第7回 看護と地域社会

第1回のオリエンテーションでは、地域社会の仕組みを知るうえで、地域のもつ意味を考えることの重要性を地域格差がみられるいくつかの事例をもとに指摘した。そして、経営（マネジメント）の視点を取り入れた、現場の改善と政策論議の必要性を強調した。最後に、授業計画を提示し

第1表 社会学のイメージ

難しそう	13
社会の仕組み	11
政治・経済	6
地理・歴史	5
暗記・覚えることが多そう・堅苦しい	5
特になし	3
合計	43

資料：アンケート回答結果より作成。

第2表 学びたいこと

看護について	12
看護師になるための知識や技術、人間性	8
社会について	7
専門的知識	4
将来使える知識や技術	2
その他	8
合計	41

資料：アンケート回答結果より作成。

たうえて、簡単なアンケートを実施した。

アンケートでは、社会学のイメージと今後学びたいことを記述してもらった。社会学のイメージを聞いたところ、約3割の学生が「難しそう」（13人）というイメージを抱いていた（第1表）。社会学という科目名からは、看護とどのようなかわりがあるのか想起しにくいことが理由の一つと推測される。また、「社会の仕組み」（11人）という回答は、オリエンテーションにおける授業の内容が反映されたとみてよい。「政治・経済」（6人）、「地理・歴史」（5人）、「暗記・覚えることが多そう・堅苦しい」（5人）といった回答は、高等学校までの社会系科目を想起した結果であると考えられる。このことから、一部社会人を含むものの、その大半が高等学校卒業後間もない学生にとって、社会学に対する正しいイメージはほとんどないに等しいことがわかる。

今後学びたいことを聞いたところ、約3割の学生が「看護について」（12人）、約2割が「看護師になるための知識や技術、人間性」（8人）と、約半数の学生が看護師になるために必要な看護に関する基礎知識や技術を学ぼうとする姿勢がうかがえる（第2表）。「社会について」（7人）学びたいという回答もみられたが、その理由として、看護と社会とのかかわりを意識しているか、社会学の講義において学びたいことに限定して回答しているものと考えられる。

各回のテーマは、いずれも地域社会の仕組みを理解するためのきわめて今日的な地域課題である。これらのテーマは、社会学にとって有意義であるだけでなく、地理学に

においても活発に議論が行われている。第2回～第4回の前半部では、食、経済、防災と、現代日本の地域社会が直面する課題を取り上げた。第2回では、徒歩圏内に生鮮食品店がなく、生鮮品へのアクセスが限られる地域を示す、フードデザート問題を紹介した。需要分布密度の地域差をもたらす食品サプライヤーの参入度の地域格差といった地理的要因に加えて、需要者側の社会的孤立など社会的要因も、フードデザート問題を生じる理由の一つであることが示される。また、フードデザート問題の解決策を検討することによって、地域社会における問題解決の困難性と公的政策のあり方を考える機会を設けた。

第3回では、企業の成長戦略について場所がもつ意味を考えた。企業活動を行う場所によって、長期的な収益性が左右される。企業によって将来の競争力が得られそうな場所のチカラを類型化するとともに、立地戦略の方向性を検討した。地域による企業の参入度の差は、資本の論理が貫徹する資本主義社会において地域社会のあり方を決める。そのため、地理学的視点から企業の立地戦略を理論的に検討することは、地域社会の特性を見出すうえで有意義である。また、場所と企業の成長戦略との関係を考えることは、医療・福祉法人など医療関係組織の立地戦略の分析にも有効である。

第4回では、わが国の防災における課題と今後のあり方を検討した。戦後、行政主導の防災対策が推進されるなかで、津波避難における共助のあり方を、高知県南国市における自主防災組織の取り組みや、地域住民の防災意識を事例に検証した。また、津波浸水シミュレーションを用いた防災教育とともに、防災無関心層（子どもの保護者や一人暮らしの高齢者）へのコミュニケーションを検討した。防災教育の本質は、自助意識を高めるとともに、自助では命を守り切れない災害弱者に対して、共助でカバーする態勢を整備することであると考えられる。後者に関して、災害犠牲者をゼロにする高い防災力は、地域社会における血縁、地縁、社縁に基づく豊かな社会関係資本、いわば顔の見える関係が必要になることを指摘した。

第5回～第7回の後半部では、医療、健康、看護とより学生にとって関心が高いと考えられるテーマを取り上げた。第5回では、筆者の先行研究(中村, 2014)をもとに、縁辺地域における医療関連施設がどのようにして経営の合理化を図りながら医療サービスの公平性の維持に努めているのか、上五島地域内外の各主体の取り組みから考察した。縁辺地域では、医療機関の抱える時間的・距離的制約を克服するため、遠隔医療におけるICTの活用と救急搬送体制の確保が不可欠であることが示される。しかし、合理化の結果、同じ地域内であっても、医師や看護師の不足のために診療所の新設計画が実現しなかったり、入院機能が集約された病院では救急患者の搬送件数が増加したため

に勤務環境の悪化が懸念されたりしている。さらに、医療資源の偏在が拡大することにもなる問題が生じていることも明らかにされた。

第6回では、社会の二極化と消費・流通の二極化とのかわりを考察するとともに、格差社会と健康・疾病への影響を検討した。前者では、社会の二極化は品質訴求と価格訴求という流通・消費の二極化をもたらすことが示される。後者について、先進諸国では絶対的な貧困でなくとも、相対的に低所得であること、あるいは経済格差・所得の不平等が大きいことでも健康に悪影響を及ぼす可能性があることを指摘した。心理的な因子が個人の問題ではなく、社会のありよう（その人が暮らしている社会における所得格差）に影響されるという、相対所得仮説に基づいている(近藤, 2005)。健康の地域格差を考えることは、患者を個人の問題に帰するのではなく、地域社会の構成員として患者を理解することにつながる。

第7回では、看護と地域社会との関係を検討した。前半では、離島における在宅医療体制の実態を、長崎県上五島地域を事例に検討した。その結果、医療再編によって生じた医療アクセスや訪問看護力の低下を、NPOや社会福祉協議会による介護サービスが補う構造が明らかになった。しかし、介護・看護人員不足に加えて、周辺地域のボランティア不足によって、要支援者でありながら認知症高齢者への対応の困難性が指摘された。

後半では中山間地域の事例として、高知県内の基幹病院を中心として、現在の医療システムがいかんにして維持されているのか検討した。県西部の山間部を中心とした医師派遣は、早期の県・11市町村・医師部会の協働によって実現した。また、へき地医療拠点病院が中央医療圏への患者流入の歯止めをかける一定の役割を果たしている。今後、二次医療圏で完結しうる地域包括ケアシステムが構築できるかどうかは、医療・介護資源配分に対する関係主体間の利害調整プロセスに大きく影響されるものと考えられる。このように、医療サービス供給におけるガバナンスは、地域によって多様な形態をとり、自然条件(山間部、離島)に加えて、人口や医療資源分布、制度的遺産といった社会条件に強く影響されることが示された。

第7回の授業後に地域社会の仕組みを知るため、地理学的視点が重要であることをメッセージとして伝えた。特に、現象を多面的にとらえ、社会・文明のあり方を見出すため、常識にとらわれずに複眼的なものの見方をすることが必要であることを伝えた。

#### IV. 講義後アンケートの結果

##### 1. 講義の感想

第7回の講義最終回において、講義の感想と抱負を自由に回答してもらった。第1回の講義後アンケートと同様、

1年次の全履修生43名の回答を分析対象とする。

まず、特定の講義の内容を具体的に取り上げ、理由とともに記述した回答が22名みられた。どの講義回に言及したかについて、複数の講義内容に言及した回答を重複して集計すると、第2回が3名、第3回が1名、第4回が5名、第5回が10名、第6回が1名、第7回は14名であった(第3表)。第7回の回答数が多い理由として、当該講義後にアンケートを実施したために印象に残りやすかったことと、履修生にとって関心の高い高知県における医療・看護をテーマとした内容であったことが考えられる。その回答を以下に示す。

- ・改めて高知県の病床数の多さに驚いた。
- ・老老介護の実態が統計から理解できた。
- ・高知県の高い高齢者人口比率と医療体制の不備が理解できた。
- ・これからの看護にも必要となってくる知識ばかりで面白かった。高知県の医療について、看護師としてすべきことが分かった。
- ・現在の社会にしくみについて学び、新しい発見(病床数を減らすと困る人、不便になる人がいる)がたくさんできた。
- ・高齢者の医療・介護問題をしっかり考えなければならないと感じた。

医療(第5回)と看護(第7回)の双方について言及した回答もみられた。特に、条件不利地域における医療アクセスの困難性や医療アクセスの地域格差に言及した回答が目立った。その回答を以下に示す。

- ・地域医療における仕組みや問題点について知ることができた。
- ・地域医療の現状が分かった。
- ・医療体制は地域によって特性が違うことが分かった。
- ・医療アクセスが悪い地域があることが分かった。
- ・医療・看護という側面のみにおいても、社会は常に大きく変化していることが分かった。
- ・医療サービスを気軽に受けられない人々がいることを知った。

以上のように、看護に直接関係する、医療・介護体制の現状を理解したことがわかる。特に、講義で紹介したデータから、島嶼部や山間部における医療体制の不備などを考えられる。こうした事実を、看護職として何をすべきかを考えることに結び付けた回答もみられた。

食(第2回)、経済(第3回)、防災(第4回)、健康(第6回)の各回についても個別に取り上げる回答がみられた。その回答を以下に示す。

- ・格差やフードデザートなど現在の社会問題が含まれていて面白かった。(第2回、第6回)

第3表 感想

第2回(食と地域社会)	3
第3回(経済と地域社会)	1
第4回(防災と地域社会)	5
第5回(医療と地域社会)	10
第6回(健康と地域社会)	1
第7回(看護と地域社会)	14
日本・社会・地域の現状の理解	9
看護との関連性	5
データや図表の有用性	2
今まで目を向けていなかった問題の把握	2
格差や他者理解の必要性	2
議論の有用性	1
合計	55

資料：アンケート回答結果より作成。

- ・フードデザート問題やスーパーの立地問題を通じて社会学に興味を持った。(第2回)
  - ・自分の知らない地域では病院に行くのも食べ物を買うにも困っている人がいるということに気づき、いろんなことに目を向けて、興味を持って、何が起きているのかを知るのとはとても大切だと思った。(第2回)
  - ・医療体制や経済的な面を今まで見てきた視点とは違う視点で見ることができた。(第3回、第5回)
  - ・高知県の医療の現状や問題点、大地震のリスク、高齢者への対応など医療従事者として生きていくときに役立つ知識が多かった。(第4回、第5回、第7回)
  - ・地域社会の現状(防災対策や僻地医療の実態)が分かってよかった。(第4回、第7回)
  - ・防災のシミュレーション地図にはリアリティがあった。(第4回)
  - ・高知県の地震・津波対策など日本の現状も少しは理解することができた。表などで社会の移り変わりを確認できた。(第4回)
  - ・地域医療、訪問介護、地震・津波などいろいろ医療に関係していることが分かった。(第4回、第5回、第7回)
- 以上の回答が対象とした講義内容は、必ずしも医療や看護と直接にはかかわりのないテーマである。しかしながら、回答をみると、地域社会の仕組みを知ることは、自らが将来看護職に就くうえで有用であると考えていることがうかがえる。

次に、特定の講義内容ではなく、講義全体を通じて感じたことを記述した回答が21名において確認できた。うち、日本・社会・地域の現状を理解したとの回答が9名、看護との関連性を指摘した回答が5名、データや図表の有用性を指摘した回答が2名、今まで目を向けていなかった問題が見えたとする回答が2名、格差や他者理解の必要性を指摘した回答が2名、理論の有用性を指摘した回答が1名で

あった (第3表)。

以下に、看護との関連性を指摘した回答を示す。

- ・社会の現状を把握でき、看護師になった時に役立つ。
- ・社会・地域と関連して看護につなげて考えることで違う視点から考えられた。
- ・看護師という仕事を通じてどう社会と向き合っていくのかを考える上で社会学の重要性が分かった。
- ・社会学が看護と関連性があることが分かった。
- ・自分たちに関わりがあることがテーマになっており、授業を受けるのが楽しかった。

以上の回答から、講義の内容が、看護に携わる看護師が地域社会やその構成員たる患者とどう接していけばいいかを考える機会を提供したものと考えられる。データや図表の有用性を指摘した回答は以下の2つであった。

- ・日本の社会問題についてデータを見比べながら学び分かりやすかった。
- ・図表などを読み取る力が必要で大きな視野でみるのが大切だと思った。事例に対して、どうすれば地域住民が喜ぶのかを考えることが大事だということを学べた。高知以外の地域の現状を知ることができた。

以上から、データや図表を適宜用いることで、地域を相対化し、地域格差の意味するところを正しく把握することにつながったものと考えられる。格差や他者理解の必要性を指摘した回答は以下のとおりである。

- ・財政難だからといって思いやりをなくしてはならない。
- ・便利にしようとしてもその反面、困っている人がいるということが分かった。

これらは、サービスの利用機会の地域差とその要因についての理解を前提としており、地理学的視点の導入効果が表れた回答といえる。以上、各講義のテーマに関する感想、すべての講義を通じた感想いずれにおいても、否定的あるいは批判的な内容はみられなかった。むしろ、地域社会について将来の看護職に資する地理学的視点の獲得につながったとみなせる肯定的あるいは好意的な回答が大部分を占めた。

## 2. 抱負

抱負についての回答は25名から得られた。いずれの回答においても、将来、医療従事者として地域社会とかかわるうえで、講義の内容や視点を生かしたいという内容を含んでいた。より具体的な内容を記述した回答を以下に示す。

- ・看護師になった時に**さまざまな社会背景**を考えながら患者と接していなければならない。
- ・看護師として社会にかかわっていくうえで、**客観的に物事をとらえる視点**が大事になっていくと感じた。
- ・社会を**いろいろな目線**で見ることが大事なことだと思った。

- ・医療アクセスが悪い地域があるということを頭に入れておきたい。
- ・自分たちも将来の防災対策について考えるため、今までの失敗をそのままにせずしっかりと学び活かさないといけない。

上記の回答のうち、将来、看護師として、さまざまな社会背景を考えながら患者と接しようとする姿勢がみられた。これは本講義の狙いである、地域社会の構成員として患者を理解する視座が含まれている。また、客観的に物事をとらえる視点や、社会をいろいろな目線で見るといった視座は、ケア供給者と患者との相互作用の橋渡し役として、異なる地域社会の性格への対応が求められる看護師の役割期待に沿うものと考えられる。

さらに、医療アクセスが悪い地域があることや、これまでの防災対策が万全ではないことを認識しておくことは、将来の地域社会や患者への対応を考えるうえで必須の知識である。以上、地理学的視点は、地域社会を客観的にとらえるうえで有効であったが、さらに自らの役割を見極めて、地域社会とどのように接するべきかについて見直すきっかけを提供するうえでも有効であったと考えられる。

## 3. 看護師に求められる役割と地理学的視点

従来の講義において、直接看護実践に結び付きにくい社会学の抽象的理論や、看護に関する実践的研究が紹介されてきた。しかし、アンケートの結果から明らかになった、地理学的視点を踏まえた講義上の工夫は、①将来の職業に密接にかかわる、医療、健康、看護といったテーマを講義の複数回にわたって設定したこと、②地域社会を特徴づける要因として、今日的な地域課題である、食、経済、防災といったテーマを積極的に扱ったことである。地理学的視点が看護師養成において果たす役割を考えると、①は、看護師の地域社会（地域包括ケア）における役割と機能を考えることにつながる。②は、異なる地域的文脈から患者の地域社会における位置付けを明確にすることにつながる。このことは看護師の地域社会への接し方を見直す機会をも提供する。すなわち、①と②をともに考慮することで、自然的要因に加えて、経済や政治といったその他の人文的要因を含めて、地域の特徴を客観的にとらえる視点を養うことができたものと考えられる。

また、具体例をもとに、図表や映像、シミュレーションといった視覚的表現における工夫を加えながら、条件不利性の高いさまざまな地域社会の仕組みを解説したことも、客観的に地域社会の性格をとらえるうえで効果があったと考えられる。このことは、事前アンケートの回答のうち、第1表において指摘された、「難しそう」「暗記・覚えることが多そう・堅苦しい」といった講義に対するイメージから、事後アンケートのデータや図表の有用性を指摘した回

答へと内容に変化がみられたことからうかがえよう。

地域社会のありようは決して一つには定まらない。しかしながら、多様な地域社会を客観的にとらえるための具体的手法や基礎的データの扱い方に関して、地理学の知見を踏まえて伝えることは、患者とそれを取り巻く地域に固有の自然や社会環境との関係およびその変化を正しくとらえる視点の獲得に資するものである。看護職はこうした地理学的視点を生かした実践が可能な職業の典型例といえる。

地域社会を構成する諸要因は、看護と直接関係するものとは限らない。したがって、直接看護実践に結び付きにくいと思われる理論であっても、具体例をもとにしながら、さまざまな地域社会の規定要因を積極的に取り扱った本講義の意義は大きいと考えられる。確かに、よりよい看護実践を習得するうえで、実践的内容の紹介は参考にはなろう。しかし、地域社会への正しい理解なくしては、実践の内容が果たして実践の場である地域社会や患者のニーズに対応したものであるのか評価できない。したがって、看護実践においてより重要なのは、地域社会の性格を客観的にとらえる視点を獲得することである。以上、アンケートの回答結果から、地理学的視点の導入は、地域社会の客観的の把握を通して、適切な看護を考える機会を提供しうることが確認できた。

## V. おわりに

本稿では、看護師養成課程における社会学授業の実践を通じて、地理学的視点の導入効果を検証した。特に、人口減少と高齢化ともなっており、疾病構造の変化と医療の細分化、高度化が進んでいる。たとえば、癌は慢性疾患として治療を終えてから地域社会に復帰することが目指される。その過程でさまざまな職種が連携して、地域全体の看護を考える必要が生じていることから、看護師に求められるニーズも大きく変化している。こうした現状を踏まえて、看護とその対象たる患者をよりよく理解するための地理学的視点を踏まえた社会学の講義案を提示した。同時に、上記の講義が、将来の看護実践に資する地域社会の理解につながったかどうかを検証することによって、地理学的視点の導入による効果を考察した。

本稿では、A看護学校の2016年度1年次前期に開講された「社会学」において、地理学的視点の導入を試みた。受講生に対して、第1回目の講義後にアンケートを実施し、社会学のイメージとともに、学びたいことを回答してもらった。講義最終回において、講義の感想と抱負を自由に回答してもらった。

講義において心がけたことは、地域社会の仕組みを伝えるため、できる限り実態に即した具体的なテーマを設定することであった。全7回の各テーマは、いずれも地域社会

の仕組みを理解するためのきわめて今日的な地域課題である。第2回～第4回前半部では、食、経済、防災と、現代日本の地域社会が直面する課題を取り上げた。第5回～第7回後半部では、医療、健康、看護とより学生にとって関心が高いと考えられるテーマを取り上げた。

社会学のイメージに対する回答から、一部社会人を含むものの、その大半が高等学校卒業後間もない学生にとって、社会学に対する正しいイメージはほとんどないに等しいことが明らかになった。今後学びたいことについて、約半数の学生が看護師になるために必要な看護に関する基礎知識や技術を学ぼうとする姿勢がうかがえた。

講義後の感想のうち、特定の講義の内容を具体的に引き上げ、理由とともに記述した回答では、看護に直接関係する、医療・介護体制の現状を理解したとする回答が多かった。加えて、医療や看護と直接にはかかわりのないテーマに関して、地域社会の仕組みを知ることが、自らが将来看護職に就くうえで有用であると考えていることが明らかになった。講義全体を通じて感じたことについても、地域社会について将来の看護職に資する地理学的視点の獲得につながったとみなせる肯定的あるいは好意的な回答が大部分を占めた。

抱負に関して、いずれの回答においても、将来、医療従事者として地域社会とかかわるうえで、講義の内容や視点を生かしたいという内容を含んでいた。地理学的視点は、地域社会を客観的にとらえるうえで有効であったが、さらに自らの役割を見極めて、地域社会とどのように接すべきかについて見直すきっかけを提供するうえでも有効であったと考えられる。

本稿の結果は、看護師養成課程の1年次において、人間を統合的に理解できる能力や科学的思考ができる能力を身につけ、社会の変化に対応しうる基盤と看護学の基礎的知識・技術・態度・行動を学ぶという調査対象校の目的に照らして、地理学的視点を獲得することの意義が大きいことを示唆している。ただし、講義内容の体系化にあたっては課題も多い。現状では、看護師養成課程の必修科目として、地理学関連の科目が設置される例はほとんどないため、地理学的視点を踏まえた講義の機会が少ないと考えられる。実際に、本稿では「社会学」の講義でありながら、地理学的視点の導入を試みた。また、地理学関連の科目が設定されたとしても、従来の地理学のテキストにおいて、医療、看護、健康といった看護に直接関連するテーマを扱ったものはみられない。さらに、看護の分野に直接関連しないテーマをどのように扱うかについては、教員の創意工夫によるところが大きい。今後、大学教育のみならず、実践的な職業教育、専門的な技術教育を行う専修学校や高等専門学校においても、地理学的視点を踏まえた教育の体系化に向けた研究の蓄積が求められる。

## 謝辞

本稿の対象となった講義を実施するにあたって、A 看護学校の教職員の皆様には、アンケートを含む講義資料の配布や回収など大変お世話になりました。また、本稿執筆中に、生前の父親に対する医師や看護師による患者ケアの実践から、患者と家族をつなぐ、医師と家族をつなぐパイプ役としての看護師の本質に触れる機会を得ました。未筆ながらこの場を借りて厚くお礼申し上げるとともに、他界した父親に本稿を捧げたい。

## 注

- 1) 前年度において社会学の講義テキストとして使用されていた、石川ほか (2012) も、第 2 章の「社会的視点とモデル」において、Parsons の病人役割論に言及している。

## 文献

- 池田光穂 (2010) : 『看護人類学入門』文化書房博文社。  
石川ひろの・進藤雄三・山崎喜比古 (2012) : 『社会学第 6 版』医学書院。  
勝又正直 (2010) : 「看護系専門職養成課程のなかの社会学—ある社会学教員の経験から」社会学評論 61 : 294-306。  
近藤克則 (2005) : 『健康格差社会—何が心と健康を蝕むのか』医学書院。  
中村 努 (2014) : 「長崎県上五島地域における医療供給体制の再編成とそのメカニズム」人文地理 66 : 405-422。  
平成 24~26 年度日本地域看護学会地域看護学学术委員会 (2014) : 「地域看護学の定義について」日本地域看護学会誌 17 (2) : 75-84。  
米山桂三 (1964) : 「看護社会学序説」慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 3 : 1-11。  
Parsons, T. (1951): “*The social system.*” Free Press: Macmillan.